

# 秘魯國に漂著せる日本人

南方熊楠

青空文庫



英譯 Ratzel, *The History of Mankind*, 1896 vol. 1, p. 164. に東西兩半球間過去の交通を論じ、「日本と支那より西北亞米利加に漂著せる人あり。又米國の貨品が布哇に漂著せる例あり。然れども南半球に至りては、高緯度に有て風と潮流が西より南米大陸に向ひ、赤道近くに隨ひ、風潮並びに南米より東方に赴き去り、凡て東半球と南米間に人類の彼此往來有りし確證實例なし。たゞ民俗相似の點多きより推して、曾て斯る交通有たるを知るのみ」と述たり。

未開の民が、風と潮流に逆うて弘まり行きし例あるは、第十一板エンサイクロペヂア・ブリタンニカ卷二十二、三四頁に、多島海人古へ航海に長じ、其邊の風と潮流主として東よりすれども、時に西よりする事有るを利用し、印度洋島より發程して、遂に遠く多島海諸島に移住せる由を言へり。 Daniel Wilson, *Prehistoric Man*, 1862, ch. vi & ※. 17. 南太平洋に太古今よりも遙かに島數多かりしが、漸々海底に沈みし由を論じ、多島海人が往昔航海術に長ぜる記述に及ぼし、人間が東半球より西半球に弘まりしは、第一多島海より南米に移りて秘魯<sup>ペルー</sup>、中米等の開化を建立し、第二に大西洋を経て西印度、中米、ブラジル等に及ぼし、第三にベーリング海峡及び北太平洋諸島より北米に入りし者の如

しと説きたり。

今東半球の赤道以北よりすら、嘗て南米に漂著せる人の絶無ならざるを證する爲に、予の日記の一節を略ぼ原文の儘寫し出す事次の如し。

明治廿六年七月十一日夕、龍動市クラパム區トレマドク街二十八館主美津田瀧次郎氏を訪ふ。此月六日皇太孫ジョージ（現在位英皇）の婚儀行列を見ん迎、ビシヨプスゲイト街、横濱正金銀行支店に往し時相識と成し也。此人武州の産、四十餘歳、壯快なる氣質、足藝を業とし、毎度水晶宮等にて演じ、今は活計豊足すと見ゆ。近日西班牙に赴き興行の後歸朝すべしと云ふ。子二人、實子は既に歸朝、養子のみ留り在り、其人日本料理を調へ饗せらる。主人明治四年十一月本邦出立支那印度等に旅する事數年、歸朝して三年間京濱間に興行し、再び北米を経て歐洲各國より英國に來り、三年前より今の家に住すと云々。旅行中見聞の種々の奇談を聞く。西印度諸島等の事、大抵予が三四年前親く見し所に合り、氏、秘魯國に往しは明治八年十二月にて、六週間計ばかり留りし内奇事有り。平田某次郎と云ふ人、七十餘歳と見え、其甥三十餘と見えたり。此老人字は書けども、本朝の言語多く忘却しぬ。美津田氏一行本邦人十四人有て、毎日話し相手に成し故、後には九分迄本邦の語を能するに及び、此物彼品を日本にて何と云ひやなど問たり。兵庫邊の海にて風に遭ひ漂

流しつ。卅一人乗たる船中三人死し、他は安全にて秘魯に著せり。甥なる男當時十一歳なりし。

其後他は盡く歿し、二人のみ残り、老人は政府より給助され、銀行に預金して暮し、甥は可なり奇麗なる古着商を營み居れりと。老人も以前は手工を營みし由、健全長壽の相有て、西班牙人を妻れりと。其乗來りし船は、美津田氏一行が著せし三年前迄、公園に由來を記して列し有りしが、遂に朽失せぬ。美津田氏一行出立に臨み、釀金して彼人に與へ、且つ手書して履歴を記せしめ、後桑港に著するに及び、領事館へ出せしに、秘魯政府に照會の上送還せしむべしと也。以後の事を聞及ばずと云ふ。一行リマ市を離るゝ時、老人も送り來り、名殘惜げに手巾を振廻し居りしと。美津田氏等桑港に著せし時、在留の邦人纔に三人、領事柳谷と云ふ人親ら旅館へ來訪されたり云々。

美津田氏は質直不文の人なれど、假名付の小説を能く讀みたり、其談話は一に記臆より出し故に、誤謬も多少有るべきと同時に、虚構潤色を加ふる事無しと知らる。又、予が日記には書かざれど、確かに美津田氏の言として覺ゆるは、件の老人くだんに歸國を勧めしに、最初中々承引せず。吾等既に牛肉を食ひたれば身穢れたり。日本に歸るべきに非ずと言ひしとか。

件の美津田氏は、其後二子（共に養子也。日記右の文に一人は實子とせるは謬り也）俱に違背して重き家累を生じ、自ら歸朝するを得ず。更にモトと名くる一女（邦人と英婦の間種、芳紀十五六、中々の美人也）を養ひ、龍動ロンドンに二三年留り居、予も一二回訪しが、其後の事を知らず。右の日記に書留めたる外にも、種々平田父子の事を聞きたるも、予只今記臆悪く成て、一筆を留めざるは遺憾甚し。近頃柳田國男氏に問合せしに、柳谷謙太郎氏明治九年十月九日より十六年三月三十一日迄、桑港領事として留任せりと答へらる。因て考るに、美津田氏一行、九年正月中リマを出立し、諸方を興行し廻り、其年十月後、桑港に著きたるならん。ブラジル、アルゼンチン等に到りし話も聞きたれば、斯く思はるゝ也。

序ついでに述べ、右の日記二十六年七月二十二日の條に「美津田氏宅にて玉村仲吉に面會す。

埼玉縣邊の人。少時足藝師の子分と成り、外遊中病で置去られ、阿弗利加沿岸の地諸所多く流寓、十七年の間、或は金剛石坑に働き、又ペンキ塗などを業とせし由、ズールの戦争に英軍に従ひ出で、賞牌三つ計ばかり受用す。予も其一を見たり。白蟻の大窠等の事話さる。日本語全く忘れしを、近頃日本人と往復し、少しく話す様に成れりと。龍動ロンドンの西南區に英人を妻とし棲み、子有りと也」と有り。所謂ズールの戦争は、明治十二年の事にて、

ナポレオン三世の唯一子、廿三歳にて此軍中蠻民に襲はれ犬死せり。當時從軍の玉村氏廿歳ばかりの事と察せらる。日本人が早く南阿の軍に加はり、多少の功有りしも珍しければ附記す。明治二十四年頃、予西印度に在りし時、京都の長谷川長次郎とて十七八歳の足藝師、肺病にてジャマイカ島の病院にて單身呻吟し居たりし。斯る事猶ほ多からん。

(大正元年十月、人類學雜誌、二十八卷)





# 青空文庫情報

底本：「南方熊楠全集第六卷 『文集※「#ローマ数字2、1-13-22」』」 乾元社

1952（昭和27）年4月30日発行

初出：「人類學雜誌 第貳拾八卷第拾號」

1912（大正元）年10月10日発行

※誤植を疑った箇所を、初出で確認しました。

入力：小林繁雄

校正：フクポー

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 秘魯國に漂著せる日本人

## 南方熊楠

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>